

# 水稻品種「にじのきらめき」の高品質安定生産技術 ～移植期と施肥量～

## 1. はじめに

水稻品種「にじのきらめき」は令和4年3月に県水稻奨励品種に採用され県内全域を対象として普及を進めています。特に県中部から北部にかけて「キヌヒカリ」の品質低下が問題となる地域への普及を期待しています。そこで高品質安定生産のため、移植期並びに施肥量が「にじのきらめき」の生育および収量、玄米品質に及ぼす影響について調査したので紹介します。

## 2. 材料および方法

### (1) 移植期について

2022年5月25日、6月8日、6月15日の3時期に稚苗機械移植しました。施肥管理は基肥に塩加磷安 284 を窒素成分で 5.0kg/10a 施用し、追肥は尿素入り NK 化成 2 号を幼穂の長さが 1mm の頃に 1 回目、概ね 10 日後に 2 回目、それぞれ 2.5kg で合計 10kg としました。

### (2) 施肥量について

施肥量は窒素成分で 8kg 区（基肥：4kg 追肥 1 回目：2kg 追肥 2 回目：2kg）、10kg 区（基肥：5kg 追肥 1 回目：2.5kg 追肥 2 回目：2.5kg）、12kg 区（基肥：6kg 追肥 1 回目：3kg 追肥 2 回目：3kg）、の 3 処理区を設けました。移植は 2022 年 6 月 8 日に行い、耕種概要、資材は（1）移植期試験と同様です。

## 3. 結果

### (1) 移植期について

移植期の早晚による精玄米重（収量）の差は

（栽培部 川村和史）

表1 移植期が生育および収量、玄米品質に及ぼす影響

試験区	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	登熟日数 (日)	精玄米重 (kg/10a)	整粒率 (%)	未熟粒率 (%)	出穂後の平均気温積算値(°C)	出穂後20日間の日平均気温の平均(°C)
5月25日移植	7.30	9.5	37	728.2	61.8	31.0	1,106	29.9
6月8日移植	8.8	9.14	37	726.4	68.8	26.6	1,086	29.4
6月15日移植	8.11	9.20	40	752.1	68.4	27.2	1,157	28.8

注) 精玄米重、収量構成要素における重量は水分15%換算値。精玄米重は1.8mmで篩い選した数値。

整粒率および未熟粒率等玄米外観品質は穀粒判別器 静岡製機ES-1000により判定。

出穂後平均気温は和歌山気象台観測の日平均気温を積算した。

ほとんどなく、いずれの移植期においても高い収量が得られました。しかし、5月25日移植では乳白粒等の白未熟粒の発生が増加し、玄米の整粒率が低下しました。出穂後の気温が高く推移したためと考えられます。出穂期から成熟期までの登熟日数は6月15日移植で長く要しましたが、いずれの移植期も平均気温積算値は概ね1100°Cでした(表1)。

### (2) 施肥量について

施肥量を多くすると生育が旺盛となり収量は多くなりましたが、10kg、12kg区では同程度でした。また、施肥量を多くすると玄米中のタンパク質含有量が増加し、食味値が低下しました(表2)。

表2 施肥量が生育、収量および食味に及ぼす影響

試験区	稈長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	精玄米重 (kg/10a)	タンパク質含有量 (%)	食味値 (point)
8kg	72.6	391.4	680.3	6.4	75.2
10kg	72.8	413.5	726.4	6.6	73.5
12kg	76.1	420.9	727.8	6.9	70.3

注) タンパク質含有量、食味値はサタケ社製米粒食味計(RLTA10B)により玄米を測定。

## 4. おわりに

「にじのきらめき」は、いずれの移植期においても高い収量が得られました。しかし、玄米品質を考慮すると早期移植は避け出穂後の高温期を回避させた方が良く考えます。また、施肥量は食味を考慮すると多肥栽培は避け慣行の窒素成分で10kg程度が適量と思われます。